

知的障がいのある児童における「主体的な学び」を促す 授業改善の研究

—主体性を引き出す授業実践の工夫を通して—

学籍番号 (229502)

氏名 (菊池肇子)

主指導教員 (早野眞美)

副指導教員 (岩崎 弘)

1. 研究の背景と目的

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（平成30年）において、「児童生徒に、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの蓄積された実践を生かしながら学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要である」と示された。

その授業改善の視点として「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が位置づけられ、これらの視点に立って授業改善を図り、質の高い学びを実現することが求められている。知的障害のある児童生徒の授業を行っていく際、学習の特性上、学習内容の理解や習得が難しく、主体的に学習に取り組むことが難しい面もある。知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、より一層、興味・関心や見通しを持たせたり、自ら判断し行動したりといった「主体的な学び」の視点での工夫・改善が重要になると考える。

本研究では、「主体的な学び」の視点に着目し、授業の工夫・改善について考えていく。「主体的な学び」の視点に立った「指導・支援の有効性や改善点」について研究を進めることで、主体的に取り組むことが難しいとされる知的障害のある児童生徒においても、学習意欲が高まったり、自ら判断し主体的に行動する力を向上させたり、さらには学んだことを次へ生かして生活経験を拡大・実行する力を身に付けたりするなど、能動的に学ぶ態度の育成を図ることができると考える。そこで、「主体的な学び」の視点を踏まえた授業を実践し、指導・支援の有効性や改善点を分析し、知的障害のある児童生徒における主体性を引き出す授業づくりや授業改善に向けた取組を示すことを本研究の目的とし、研究を進める。

2. 研究の方法

特別支援学校の小学部に在籍する知的障害のある児童を対象に、「主体的な学び」の視点を踏まえた3回の授業を実践し、その様子をビデオに収録し、その記録から授業分析を行う。それぞれの授業の中で見られる児童生徒の「主体的な学び」に関わる態度・行動について、観察項目に基づいて記録し分析をする。観察の観点として「興味・関心を持つ」「自ら判断・行動する」「粘り強く取り組む」「振り返り次へつなげる」の4観点とそれらにおける態度や行動を項目として設定し、4段階「4 よくできる」「3 ほぼできる」「2 ややむずかしい」

「1 むずかしい」で得点化し、授業分析の指標と児童の観察の観点を設けた。これらを活用して、児童の「主体的な学び」の姿に関わる行動を観察し記録することとした。その分析や児童の変容から主体性を引き出す授業づくりや授業改善に向けた取組を探っていく。

3. 授業実践と授業分析の結果・考察

第1回授業実践「季節のカレンダー作り—8月のカレンダーを作ろう—」において、児童の主体性が高い項目は、「提示した写真や実物を見ている」であった。夏の季節のものを絵や写真で見せたり、夏の音をクイズにして聞いたり、実物のスイカを持ち上げたりなど、五感を使って楽しめる提示物の工夫が、児童の興味・関心を喚起し、主体性を引き出すのに効果的であった。しかし、「まとめ」の場面では、各項目で主体性が低い結果であった。視覚的な提示物や、児童が互いに興味・関心を持ち活動できるような支援の工夫が必要だといえる。

第2回授業実践「宿泊学習に向けて一紹介カードを作ろう—」においては、第1回授業実践より「ほぼできる」以上の評価が増え、改善が見られた。その要因は、児童が楽しみな学校行事を題材にしたことや児童の「思考・判断・表現」を補助する提示物や具体物（教師の紹介カードの見本、作り方表、発表の仕方の見本など）を効果的に活用したことで、児童が活動のイメージを持つことができたからだと考える。しかし、手立てが有効だった児童とそうでなかった児童の偏りが見られた。児童一人一人の実態に応じた支援の工夫が必要であるといえる。

第3回授業実践「校外学習に向けて一楽しみなことをインタビューしよう—」の授業においては、前回の反省点を受け、一人一人の児童の学習の困難さを補いながら主体的にインタビュー活動に取り組めるように工夫した。児童にとって初めてのインタビュー活動であるので、思考・表現を補助する手立て（絵カードやペーパーサート状の発表メモなど）を活用し、段階を踏みながら指導を進めた。また、インタビューのマイクや舞台を用意し、話す・聞く役割を捉えやすいように工夫することで、前回の評価項目が低かった児童にも改善が見られ、これらの手立てが有効であったと考える。

4. まとめ

「主体的な学び」の視点を4つの観点と態度・行動の項目で見ること、主体性を引き出すための指導・支援の有効性や改善点を客観的に捉えることができた。また、これらの方法は、授業改善の取組を活性化できる一つの手立てになると考えられる。評価項目の結果から、児童一人一人における指導・支援の効果や改善すべき点を把握することができたため、次時の授業での手立てについて、視点を明確にして授業づくりをすることができた。このように評価観点を活用することは授業改善に有効であった。

今回は学校実習のため、1時間ごとの授業実践・授業分析であったが、1時間の授業改善だけでなく、単元全体、教育課程全体を通して学習効果を分析できる力も高めていく必要がある。

授業実践ごとに授業改善に取り組んできたが、改善できなかった評価項目もあった。今後も授業改善に向けて、評価観点を有効に活用しながらより一層児童のニーズを把握し、授業改善に向けた効果的な支援を模索することが必要である。このような授業評価と授業改善のサイクルを充実させることが重要であるといえる。